ジャータカ物語

入澤 崇

Jātaka Tales

まえがき

仏教はひとりでに伝わりゆくものではありません。仏教が遠くインドから日本にまで伝わったのは、その過程において多くの人間のはたらきがあったからです。僧侶はもちろんのこと、為政者や富裕な商人、芸術家や建築家、そして一般民衆など、仏教に大きな価値を認めた人たちがいたればこそ、仏教は広まっていったのです。

古代社会にあっては、「語り」が重要な役割を果たしました。とりわけ古代インドは説話（物語）の宝庫でした。民間に流布していた伝承を仏教が巧みに取り込み、仏教独特の「語り」が成立していったのです。本書で取り上げるジャータカはその典型です。

釈尊（お釈迦さま）がこの世に生まれる以前の前世の物語、それがジャータカです。ジャータカはパーリ語で説かれた南方上座部（テーラワーダ）の経蔵に含まれていて、五四七の話から成っています。本書ではその一端にふれていただきます。

前世の釈尊は菩薩と呼ばれます。ジャータカはインド文化を特色づける輪廻転生の考え方を基盤にしていて、ジャータカによれば過去世において菩薩はさまざまな生を経ています。人間だけでなく、サルやウサギといった動物、ときには鬼神である場合もあります。菩薩が主役である事例がもちろん一番多いのですが、ときに菩薩が脇役である例もあります。

ジャータカは、慈愛の大切さや徳の高い人物のあり方を教える内容からエロティックな内容まで、実に多種多様です。特権階級を批判したり、平和の尊さを説くものがあったり、子どもにもわかる教訓話があったりと、内容の豊富さには驚かされます。

世界に伝わる昔話や伝説とも関連を有していて、『イソップ物語』や『アラビアンナイト』などとも対比検討がなされています。比較文学のうえでも、ジャータカは重要な資料なのです。ジャータカの幾つかの物語は漢訳経典を通じて、わが国にももたらされました。『今昔物語』の「月の兎」の話は特に有名です。

パーリ語のジャータカは、どの話も三部から構成されています。

㈠　現在世物語：釈尊がいかなるきっかけによって過去世物語を説くに至ったかの部分。

㈡ 過去世物語：現在世に起きた出来事の由来が語られるジャータカの主要部分。
㈢ 結合：現在世の登場人物と過去世に登場する人物（動物や鬼神の場合もあり）を結びつける最終部分。

ジャータカの中心となるのは過去世の部分で、本書は過去世物語に焦点をあてています。

ジャータカは一般の民衆向けに語られた説話です。それ故、古代インドで広く仏教が受容されていくのにジャータカの果たした役割は、極めて大きいものがありました。

一般民衆に仏教が伝えられる舞台となったのは、主に仏塔でした。仏塔というのは、釈尊の遺骨（舎利）を内蔵した建造物のことで、門や欄楯（石の垣根）に釈尊の生涯を語る図像（仏伝図）とともにジャータカが彫刻されたのでした。

本書は主に古代インドの仏塔に施されたジャータカ図を紹介するものです。ジャータカの図像は画面構成が複雑で、見ただけですぐにストーリーが理解できるものではありません。解説者の存在が予想できます。事実、説法師（バーナカ）という役職の僧侶が仏塔に関わっていました。おそらくは彼らがジャータカを人々に語り伝えたものと思われます。

ジャータカを彫刻した無名のアーティストたちや、一般民衆に向けてジャータカを教化に活用した無名の説法師たちに思いをはせていただければと思います。

視覚を通して伝えられた「語りの文化」。それは仏教文化の大きな特徴です。古代インドの「語りの文化」をどうぞお楽しみください。

ジャータカ物語の始まり始まり～

入澤　崇

ジャータカ物語 ―目次―

兎の施し 10
誘惑された一角仙人 13
天馬に救われた男たち 16
象の牙 20
マンダータル 23
布施太子 26
猿王物語 29
チャンペッヤ龍王 32
ルル 35
シヴィ王 39
天女ヒリー 42
ヴィドゥラ賢者 45
善事太子 48
スジャータのはかりごと 51
よみがえったサーマ 54
一本の白髪 57
夫の危機を救うのは 60
ブーリダッタ 63
箱の中 66
盗まれた蓮根 69
鶉の報復 72
牝猫の誘惑 75
王子の出家 78
ニグローダ 81
襲われかけた猪 84
浮気した王妃 87
サンカパーラ龍王 90
ラーマ王子物語 93
叱られたボス猿 96
母を養う白象 99
人食い王の改心 102
怒った長者 105
仲裁に入った豺 108
恩知らずの猿 111
憎しみをうち捨てて 114
勘違いをした行者 117
大蟹退治 120
早く後継ぎを 124
出家した国王 127
怠けもの 130
己を省みる動物たち 133
鳩の肉 136
泥にまみれて 139
あとがき 142

撮影／丸山 勇

ジャータカ物語

ジャータカとは……

仏教の開祖である釈尊の前生物語、それをジャータカという。「本生譚」「本生話」とも呼ばれ、仏教では大変重視されてきた。パーリ語で編纂された仏教聖典には五四七話がおさめられているが、現在あるような形で整えられたのは、およそ五世紀頃のことである。ここで紹介する図像資料はそれ以前のもので、ジャータカの原形を知るうえで貴重である。

兎の施し

月に兎がいる。

どうしてこんなことがいわれるようになったのか。ジャータカにこんな話がある。

森の中に一匹の兎（釈尊の前生）が住んでいた。この兎には猿と豺と獺の三匹の友達がいた。ある日、一人の修行者がやってきて、それぞれの動物に食物を乞うた。「よろしゅうございますとも。あなたさまに食物をお布施いたしましょう」と、猿も豺も獺も、その日手に入れた食物を差しだすのだった。修行者が兎のもとを訪ねた時、兎は施す食物を持っていなかった。

「私は自分を捨てて火の中に飛びこみます。私の身体が焼けたら、その肉を食べて、修行をお続けになってください」

そう言って兎は燃え盛る火に近付き、

「もし私の毛の中に生き物がいたら、それらが死ぬことがありませんように」と呟いて火の中に身を投げた。

ところが薪の火は兎を焼かなかった。

これは一体どうしたことか、兎は不思議がった。実は、その修行者の正体は帝釈天という神で、兎を試すためにやってきたのだった。

「たとえ誰がやってきて自分を試そうとも、私に施しを惜しむ気持ちを見つけ

兎本生（ササジャータカ）

（ゴーリ出土　3世紀中頃　チェンナイ（旧マドラス）州立博物館蔵）

右側の人物は修行者（帝釈天）。その前で燃えている火に、兎が飛びこもうとしている。兎の左に立っている者は帝釈天で、兎の功徳をたたえているのか、上空（月）を指している。左に獺、猿、豺それに供養者の姿が見える。後方に仏塔（ストゥーパ）が描かれているのが面白い。

ジャータカのレリーフが出土したゴーリは、南インドを代表する仏教遺跡のひとつ。上の写真はジャガヤペータ仏教遺跡附近からゴーリ方向を望んだところ。

ることはできないでしょう」

と、兎は言い放った。帝釈天は、兎の立派な行いが世界中に知れわたるようにと、山を圧しつぶして、山の汁を絞り取り、その汁で月面に兎の姿を描いたのだった。

古代インドでは、月のことを別名「兎を持てるもの」と呼んだ。

誘惑された一角仙人

家に妻を残して出家した修行僧は、なかなか妻への想いが断ち切れなかったものらしい。釈尊は、そんな修行者にこのような話をしている。

一匹の牝鹿が精のついている草を食べ、水を飲んで妊娠する。生まれたのは人間の子。仙人（釈尊の前生）はその子を我が子とし、一角仙人と名づけた。一角仙人は成長し、森のなかで厳しい修行を続けた。修行の厳しさは、帝釈天のすみかまでを揺り動かすほどで、帝釈天は一角仙人の修行を邪魔しようと一計を企（くわだ）てる。帝釈天のたくらみというのは、地上に三年間雨を降らさずにおいて、国中を混乱に陥れ、国王を次のようにそそのかすことだった。「雨が降らないのは一角仙人の行っている苦行のせいだ。王の娘ナリ

ナリニカージャータカ
（マトゥラー出土　3世紀頃　マトゥラー博物館蔵）
ナリニカー姫が一角仙人を誘惑している場面。